道の駅と地方創生　道の駅のつはる

大分市　農林水産部　農政課

1.「道の駅」とは？

長距離ドライブが増え、女性や高齢者のドライバーが増加するなかで、道路交通の円滑な「ながれ」を支えるため、一般道路にも安心して自由に立ち寄れ、利用できる快適な休憩のための「たまり」空間が求められています。

また、人々の価値観の多様化により、個性的でおもしろい空間が望まれており、これら休憩施設では、沿道地域の文化、歴史、名所、特産物などの情報を活用し多様で個性豊かなサービスを提供することかできます。

さらに、これらの休憩施設が個性豊かなにぎわいのある空間となることにより、地域の核が形成され、活力ある地域づくりや道を介した地域連携が促進されるなどの効果も期待されます。

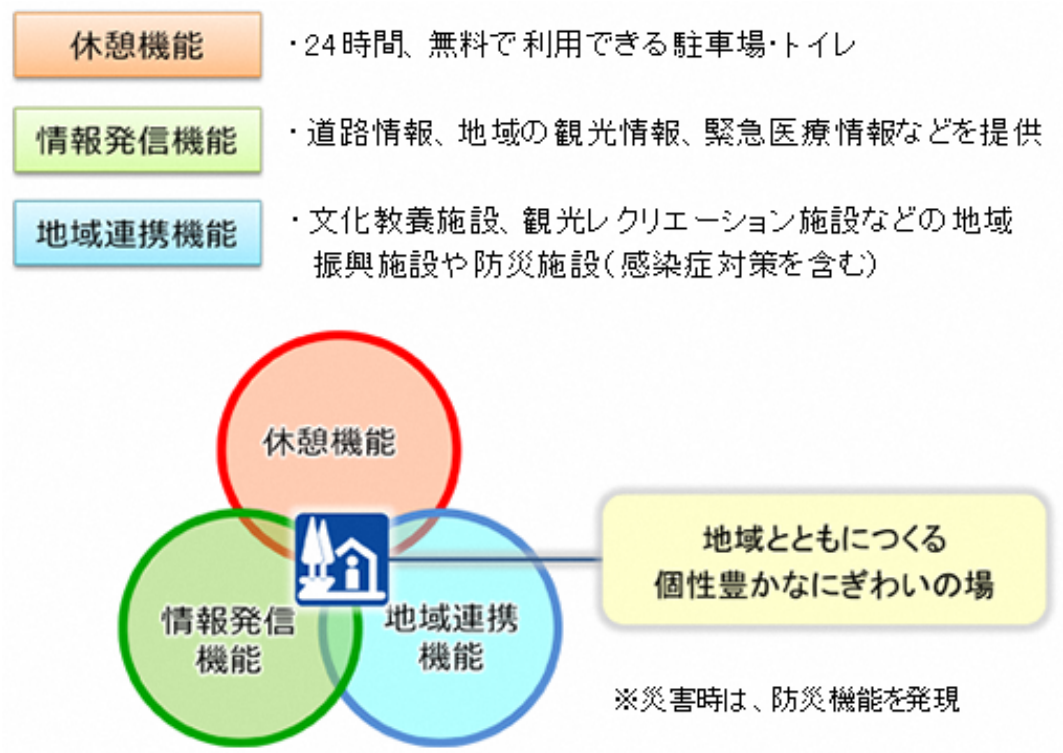
こうしたことを背景として、道路利用者のための「休憩機能」、道路利用者や地域の方々のための「情報発信機能」、そして「道の駅」をきっかけに町と町とが手を結び活力ある地域づくりを共に行うための「地域の連携機能」、の３つの機能を併せ持つ休憩施設「道の駅」が誕生しました。

「道の駅」の目的と機能

○目的

- 道路利用者への安全で快適な道路交通環境の提供
- 地域の振興や安全の確保に寄与

○基本コンセプト



（引用国土交通省 HP）

2．大分市の特性

Ⅰ．歴史

大分という地名の由来は、豊後国風土記において、広々とした美田、碩田と名付けられ、後に「大分」と書かれるようになったのが始めともされており、古代から現代まで、大分市は政治、経済、文化の中心的な役割を果たしてきています。

中世・戦国時代には、大友宗麟の下に隆盛を極め、最盛期には北部九州の大半を支配下に治めて、世界にも知られた全国有数の貿易都市豊後府内が形成されました。これに伴い、医術、音楽、演劇など日本で最初の西洋文化が大きく花開きました。

その後、大友氏は島津氏や龍造寺氏などとの対外戦争に敗れ、内部抗争もあって次第に衰退し、江戸時代には小藩分立の中、独特の地域づくりが展開されました。

明治時代に入ると、近隣の町村との合併が繰り返され、明治44年（1911年）4月には市制が施行されました。

激動の昭和時代にあって、太平洋戦争による戦災と混乱、そして復興を経て、高度経済成長期には、新産業都市として、鉄鋼、石油化学、銅の精錬など重化学工業を中心に発展を遂げ、近年ではIT関連企業が進出するなどさまざまな産業が集積しています。

交通では、日豊、久大、豊肥の鉄道3線や高速道路など県内外からの主要幹線道が合流しており、また、豊後水道を経由して内外に通じる海上交通が発達し、東九州における経済活動の一大拠点を担っています。

平成23年(2011年)4月には「市制施行100周年」を迎え、ますますの飛躍が期待されているところです。

Ⅱ．自然

大分市は、九州の東端、瀬戸内海の西端に位置し、周辺部を高崎山、九六位山、霊山、鎧ヶ岳、樅木山などの山々が連なり、市域の半分を森林が占めるなど豊かな緑に恵まれています。これらの山々を縫うように県下の二大河川である大野川と大分川が南北に貫流しながら別府湾に注いでいます。その下流部には大分平野を形成しており、海岸部においては、北部沿岸海域は水深が深く、東部海岸は豊予海峡に面したリアス式海岸で天然の良港となっています。

市域は東西50.8キロメートル、南北24.4キロメートル、面積502.39平方キロメートルと九州でも有数の広い市（107市中15番目、県庁所在地では、宮崎市、鹿児島市に次いで3番目）となっています。

また、気象は瀬戸内海気候に属し、温暖で、自然条件に恵まれた地域です。

3．道の駅整備に向けて

本市は、古くから瀬戸内ルートを主幹にした「海の道」を媒介に歴史を刻み、政治経済のみならず、交通、情報、文化などあらゆる面で都市機能が集積し、東九州の要地としての役割を担っています。また、平成17年1月1日に、旧大分市と合併した野津原地域（旧野津原町）は、市中心部と竹田地域や阿蘇くじゅう国立公園を結ぶ交通の要衝に位置し、緑豊かな自然環境と農林水産資源をはじめとする多様な地域資源を有する地域です。

その一方で、少子高齢化、過疎化の進展により地域の活力が低下し、地域コミュニティの維持も難しくなってきているとともに、地域の主要産業である農林業は、生産者の高齢化、担い手の不足が深刻となっ

ており、価格の低迷などとあいまって年々厳しさを増しています。また、商工業においては、各個店の閉店など住民生活を支える機能が低下してきているとともに、観光分野においても、観光客の増加を目指すための新たな観光資源の掘り起こしや効果的な情報発信が求められている状況であり、こうした地域コミュニティの衰退、地域産業・経済の低迷などの課題に対して、地域全体の振興策を講じる必要があります。

こうしたなか、国が策定した「大分川ダム建設計画」において、水源地域の活性化、産業振興の拠点となる交流拠点農産物直販所として「道の駅」の整備が主要事業に位置付けられ、平成27年には大分川ダム周辺施設整備検討会を地元関係者及び関係団体の代表者で設立し、「道の駅」構想について検討してきました。

また、平成28年の東九州自動車道北九州市～宮崎市間の開通により、大分市から熊本市方面をつなぐ国道442号が持つ広域交通網の重要路線としての役割はますます高まり、また、「のつはる寿司」をはじめとした、地元素材にこだわった加工品開発を進めるなど、地元商工会や地域の団体グループなどによる多様な加工・販売活動も活発になり、「道の駅」整備への気運が高まっていきました。

こうしたことから、主要産業である農林業の6次産業化を進め、商工業、観光業との有機的な連携や地域内外への情報発信を行うことで、交流人口を拡大し、地域産業、経済の活性化を図ることが急務でありました。

そのため、大分川ダム（現ななせダム）を地域活性化の核として捉え、国道442号からダム湖を望む位置に、その中核となる交流拠点機能を有した農産物等直販所としての「道の駅」を整備し、地域住民が気軽に利用できるコミュニティ機能を兼ね備えたことにより、高齢者等の生きがいと交流、地域内外の人々が集いふれあう、賑わいの空間を創出し、活力ある地域づくりを推進していきます。

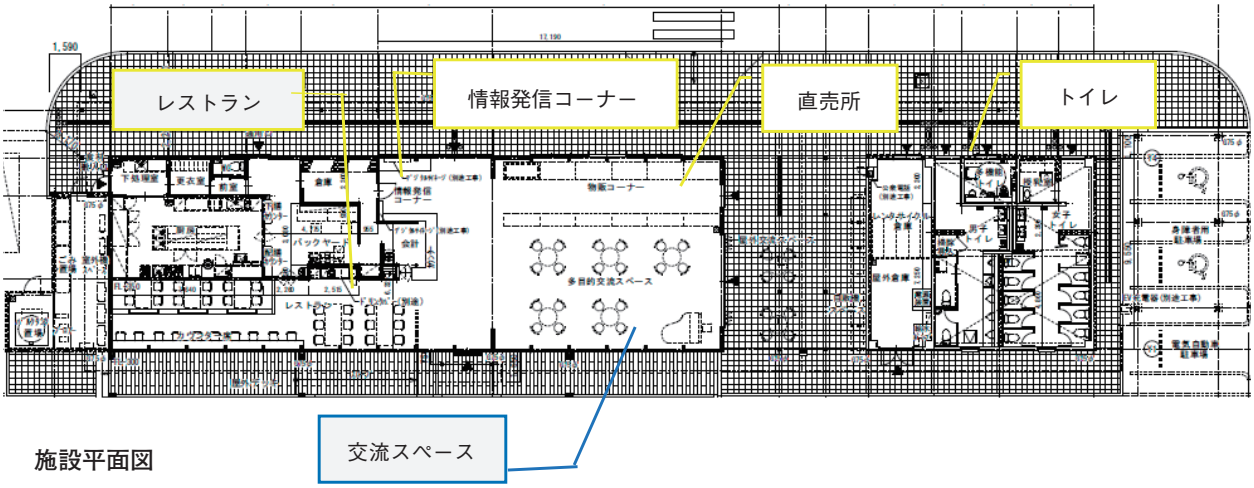
4．道の駅のつはる　施設概要

【敷地規模】　敷地面積約5,942㎡
【建物規模】　建築面積684㎡、延床面積約534㎡
【駐 車 場】　大型車5台、普通車37台、身障者用駐車場2台
【ト イ レ】　男：（小）5器、（大）2器
女：10器
多目的1箇所　（小）1器、（大）1器

◇直売所　地元野津原で採れた新鮮な野菜をはじめ、大分市の地域資源を活用した商品など特色ある加工品を販売しています。

◇レストラン　地元でとれたジビエを活用したカレーや、冠地どりを使用したハンバーガーなど「道の駅のつはる」オリジナルの美味しさを味わえます。

◇交流スペース　道の駅を訪れた人同士が集い、交流できるスペースです。



施設平面図

道の駅のつはる外観

直売所

レストラン

交流スペース

トイレ

情報発信コーナー